

『社会科教育』一九六五年一月（社会科教育研究会）

現代社会の要求と社会科の学力 2

矢口 新

一

社会の要求をどうとらえるかということについての確たる方法論があるであろうか。考え方によってはあるともいえるし、考え方によってはないともいえる。単純に考えれば、与論調査的な方法でも社会の要求をとらえることができる。与論調査的な方法でも社会の要求をとらえることができる。与論調査的な方法の特色は二つの面からとらえることができる。一つはあなたの要求するところは何かというように要求そのものをずばりと聞くということである。もう一つの点は、その要求はさまざまな種類があるから、社会全体の要求としてまとめるには、重味をつける必要があるということになる。つまり個々のものをよせて全体をまとめるのだから多数決ということになる。社会全体の人に聞くことができなければ、抽出をするわけだが、その抽出には重味をつけるということになる。

しかしこういう方法にも難点はいくつもある。個々の人に社会の要求する社会科の学力をどう考えるかと聞いた場合、そのひとりひとりが社会科というものをどう考えるか、学力というものをどう考えるか、社会の要求というものをどういう態度でとらえているかについて大

きなちがいがあろう。与論調査ではそういう根底になる思想体系までとらえることができないから、皮相なところにとらえることになりがちである。ただ言葉の上だけの異同ということになる。たとえば社会の要求というもののとらえ方でも、社会というものはつきり自覚して考えることのできる人もいれば、ただ漠然と世の中と考えて、自分が生活するときに必要だと感じたことを主観的にのべる人もいよう。ひとりひとりの意見の質にちがいがあつて、与論調査の場合には多くそういうものを無視して集計するということになりがちである。

社会の要求というような言い方は、社会現象というような言い方と同様に、すでにきわめて社会科学的概念で、社会が要求するというようなことが事実としてあるわけではない。ひとりひとりの人間は要求するが、社会はものをいわない。社会が何かを要求している、ものをいっていると考えるには、そこに既に一つの屈折が必要なのである。比喩的にいえば社会という一つの怪物が働くために、必要なものというように考えるのである。こういう社会の要求をとらえるには、ひとりひとりの意見を聞くということより、社会を一つの怪物として見る見方に徹しているものが、その立場で、その怪物の必要な機能をとらえるという考えの方が妥当かも知れない。それは一つの解釈ということになるかも知れない。そして或る人の解釈と、他の人の解釈は必ずしも一致しないかも知れない。しかしそういう解釈を集めて、それを整理するという方が与論調査よりも合理的な方法であるかも知れない。

私のこれから述べることは、そういう解釈の中の一つの解釈であることをあらかじめ承知しておいていただきたいと思う。

二

東京都では、今年の夏、水不足で非常に苦勞した。いろいろ考えてみると、結局そこには見通しのわるさというか、計画性の不足ということがあったようである。ただし水道局はもっぱらこれを天候という自然のなせるわざに帰せしめようとした。自然のなせるわざにするのも一つの考え方であり、**人質**にしようとするのも一つの考え方であろう。けれども今はそういう責任論をしているのではない。問題は、社会が苦しんだという事実であり、その事実が今後起こらないようにすることはわれわれ人間の願いであるだろう。そこでたとえ未曾有の干天つづきだとしても、それをのがれることが出来ればそれに越したことはないわけであるが、そのためには、どれだけの見通しと、計画があればよかつたかということは考えることができる筈である。

今から考えれば、小河内ダムができたときにすでに、次の計画を考えるべきだったということは、当時の責任者たちも述べていることであるが、その当時においてもそのことが全然気づかれなかったわけではないようである。急激な都の発達ということも気がついていたことであり、産業の膨張ということも予想されていた。このことはまたわれわれに教訓を与える。気がついていたのであるが、それが実行に移されなかったのか。人間は自然の動きを科学的にみて、これを克服したように、社会の動きもこれを科学的に見て克服しようとしているのではないか。気がつくというのは既にそこに科学的な見方があったからであろう。そうすれば、そこに当然その科学にもとづいた実践がなくてはならない筈であった。それにもかかわらずそのままズルズルと無為に日を過したとすれば、それは科学の学力の弱さということである。もっと具体的にいえば、都市の発達を計量し、計画を立て、

実践に移すという一連の科学的処理能力の弱さによるものといわなくてはならない。社会がそういう弱点をもっていたということである。それは勿論水道の当局の頭の弱さをいっているのではない。社会全体の頭の弱さを問題にしているのである。

社会の頭の弱さというのも一つの概念である。社会というものに事実として頭がある筈がない。それはいつてみれば組織の貧弱さ、頭腦的な働きをする部門の貧弱さということである。調査し、分析し、計画する部局の弱さである。そういうものを重視しない社会の弱さであるともいえる。日本人はとかく政策の進まない責任を予算というものにかぶせる傾向がある。役所の人々には特にそれが多い。しかしこれも考えてみれば予算を処理する人々の考え方の問題やその見識の問題である。その人々が、何が重大であり、どこにどれだけ費用が使用されなければならぬかを科学的に把握しておれば、社会の必然の動きに見合った形で予算が計上される筈である。政治や行政がそういう科学性をもっているのが文明国、文化の進んだ国といわれる資格とてよいであろう。科学とは道理を示すものであり、人間の従うべき道を示すものといつてよい。そこには醜悪な、不合理な利害の取引の余地はないのである。少くともそれが理想である。そういうものが弱いのは、社会の空気の中に科学性というものが欠けているのである。社会の人々の呼吸しているものに、科学性が欠けているのである。まず第一に政治や行政の仕事にたずさわる人々に社会科学の学力が欠如している。しかしそれらの人々は、社会の一般民衆の中から選挙された人々であり、或いは別の意味で一般民衆の中から選ばれた人々であるのだから、一般の人々の中に、そもそも社会科学の学力が欠けているということになる。

水道行政が貧困であるなどという前に、われわれは自分たちの社会

の社会科学の学力の弱さを問題にしなければならない。水の不足に苦しんだという結果は確かに事実としてあることだが、それを単に当面の責任者だけの原因に帰してさわいでいるのでは、そのこと自体われわれの社会科学の学力の貧困さをあらわす以外の何物でもない。源は深く遠い所にあるのである。目さきの所で雨の降る降らないなどという事ではない。われわれの社会が調査や研究や計画の部門を強化し、科学的に事を処理する体制をもち、政治屋が活躍する余地がなくなつて来ることが将来水不足を苦しむことをなくするものになるのである。それにはしかし結局人々がそういう科学的な生活の仕方を当然のこととする雰囲気をもたなくてはならない。そういう雰囲気をつくりだせば、より科学的な識見が大切にされ、その方向で社会の施策がきまってくるようになる。今はそうでなく、よりズルイやり方が座を占めていくようになる。それは人々に合理性、科学性がなく、不合理な利己主義なもの強いからであり、それによって、個人が身を守らなければならないという事実が座を占めているからである。

三

以上いわば一つのケーススタディとして、社会が社会科学の学力を要求している姿をあらわにしてみたのであるが、そこに教育というものもその意義が存在するのである。しかし考えてみれば、こういう教育の意義が、そもそもまわりくどくて、現代の人々には受け入れにくい。民度のひくさということがあるのである。それよりもつとりばやくわかる教育の意義は、学校を出て、就職口をさがすパスポートを受け取る場所としての教育である。それは今のべた社会の要求する学力などという事は考えないで、もっと伝統的な、昔ながらの知識を要求している。

人々が要求している教育は、人々がこれまで受けとって来た昔ながらの教育である。それは古い時代からずっとつづいてきているものである。社会に関することについては、地理、歴史、修身といった形で、少くとも明治以来百年にわたって、必要だとされて来て、そのまま惰性的に必要と意識されている学力である。それは現代社会が要求している社会科学の学力とはその全体構造がちがうのではないか。その詳しいことは述べる紙数がないが、次にその点を考えてみよう。

たとえば歴史である。歴史の教育の歴史は古い。古いだけ、過去のものを多くとどめている。過去の時代につくられた歴史は過去の社会の意識を反映している。たとえば歴史教科書の中には政治の権力争いの事実はきわめて多く叙述されている。しかし前に述べた水道行政に関するような事実、たとえば都市づくりのこと、都市の発達のこと、その行政のことなどは教育内容の重要なものとは認められていない。何も水道のことを内容に入れるということを行っているのではない。一つの例として考えてみただけである。現代社会の要求する学力という点からみると、教育内容も大きく変更を必要とするのではないかという例である。日本の社会の伝統を知らなくてはならぬから歴史の教育は必要だということは誰もいうところである。それはその通りである。しかし、それは、誰が誰を殺して政権をとったなどということばかりやっていることではあるまい。もちろんそのような歴史教育が今あるというのではない。過去にはあったかも知れないが。それは例外としても、歴史というものはただ過去に起こった事柄の暗記をする教科であるという性格は現在も依然として抜けていない。誰がどうした、どんな役所をつくった。どんな絵を書いた、何をつくったということを一々おぼえなくてはならないのか。

歴史の教育は小学校でも簡単ではあるが行なわれる、中学校、高校

と大きくみれば三回も行なわれている。そのどれをみても、大きく歴史の長い期間の概説をしている。そうなると、結局は誰がどうした式にしかならない。或る時代の社会というものをとりあつかっても、「産業がさかえた。しかし一部の人を除いてはくらしは楽ではなかった」式の概説である。歴史を見る学力とは、そんなことをおぼえることなのだろうか。少なくともそんなことでは、現代社会を考えることはできないのである。

現代社会をみるのにも歴史をみて来るということは重要な意義をもっている。歴史はただ過去にあったことでなく、今に生きているものである。すぎ去ってなくなってしまうものならば、それは学ぶに値しないものである。生きているからこそ、われわれは掘り起こすのである。われわれの中に眠っているかも知れないが、生きているから問題にするのである。

現代社会は何よりも、今のわれわれの社会を科学的に整理し、動向をとらえ、正しい社会の方向を生み出す力を人々に要求している。自然を克服して行く営みをつづつつある人間は、その力を益々強くするように要求されると同じように、いわば社会を制御する力を強くもつことを要求されている。その科学的な力のなかには、歴史的に社会を見て把握する力ももとより欠くべからざるものである。しかしそれは、もろもろの歴史事実をこうだったこうだったと知ることではあるまい。

私は近頃「首都東京」という映画を製作したが、この製作に当たってははじめはスタッフの間に歴史的に分析しようという考え方は全然なかったのである。それは歴史は過ぎ去ったものという考え方があからであり、それは現在とは関係がないのだという一般的な通念があり、僅か一時間位の映画の中にはそれは除外した方がよいという意見

が強かった。しかし無理にでもその点を主張して、研究し、調査して行く間に、過去の現象がそれぞれの時代の中に明確な像をもって浮かび上がって来、それが更に現代の首都東京の中に位置づいて来た。そうして「首都東京」は既に過ぎ去ったものであるが、今に生きている歴史を半分ちかくも含んだ映画になったのであるが、それが現代を把握するのに大きな力となっているのである。

そういう過程を通じて、歴史学習とは、或る現象を時代の構造の中へ正しく位置づけるといふ総合的な把握をするものであることをスタツフは学んだのである。いわば様々な現象を都市の形成という点に位置づけ、中心的なものから次第に外側へと整理して一つの図式を描き出すプロセスが歴史の学習であるといってもよいかも知れない。要はこのプロセスにある。そのプロセスをたどることができる学力が問題なのである。今の歴史教育のように断片的事実の羅列とその記憶に意味があるのではあるまい。

しかし歴史の教育は古くから行なわれ、その惰性がつづいていて、それからなかなか抜けられないのである。いかなる時代にかなる「社会」が形成されていたか、これが単に権力構造の図式でなく追求されなくてはならぬ筈であるが、現代は結局そういう権力構造にのみ焦点があっている。アメリカの教科書の二、三のものが、民衆の生活を極めて具体的に描いているのは大きく異なっている。そういうことが日本人の権力意識をわらく育てているもとにあるともいえよう。

四

以上も一つの事例であって、問題は単に歴史にあるのではなく、いわゆる地理といわれるものも、政治、経済、社会、文化的内容といわれるものにあっても同じなのである。つまり、現代社会が基本的に、

科学的処理能力をもって展開して行かなければならない時代になって来ているのに対して、現代の教育がそれに見合う形になっていないということである。

現代社会は急速に発展しつつある。その特色は、個人の力をのりこえて、社会そのものが発展しつつあることである。組織の力がのびているといってもよい。現代の科学技術の発展といい、原子力時代、宇宙時代という組織の力のもたらした発展であり、社会の力の発展によるものである。国際社会の発展やその多角的関係の展開もまた新しい「社会」という怪物の存在形態である。現代社会は、社会や組織を把握する力を欠いては存在し得なくなっている。つまり人々に、社会科的学力が要求されるということである。社会を見ること、計測すること、組織をつくること、そういう感覚が人々に備わることなしには、社会が存続し得ないであろう。混乱と崩壊はそこから来るということである。

さて社会科的学力というものを具体的に描くよすがとして、教科書を取りあげてみよう。今の社会科の教科書の内容は、算数や数学の教科書の内容形態とは根本的に異なっている。どこが異なるかといえば、算数や数学は、例題があつて問題がある。主要な部分は練習問題である。例題はヒントにすぎない。社会科の教科書もそういう形にすることはできないであろうか。つまり社会を見る見方を訓練するのである。そうなるとおぼえることはまるでかわつて来る。今は言葉をおぼえるのである。算数や数学の教科書のようになると、問題のとき方をおぼえるのである。社会の見方、分析の仕方、資料のとり扱い方、まとめ方、解釈の仕方をおぼえるのである。そうなると、今の教科書の内容となつているものはどうなるのか。それは全部、練習問題の材料として組みなおせばよい。今の内容はこれこれであると叙述されて

いるが、それを児童生徒に答えさせるような形にかえればよい。生徒は答えるためには、材料を使用して、判断を下さなくてはならぬ。そういう資料はふんだんに教科書の中へ入れておいたらよい。たとえば六年生の単元に世界の国々とあつて、だからだとこの国はどう、どこはどうと書いてある。そのどこか一国を例題として、国をとらえるとらえ方を示す。あとの国については材料を与えて、自分で整理するというようにやるのはどうであろうか。

こういう言い方をしたのは、これからの社会科の学力を考える一つによすがとしてである。このような方向へ考え方を発展させて行く問題は、それでは、練習によつて訓練すべき学力の内容は具体的にどういうことか、国というものをとらえるということは、一つの内容として置いてよいのかというような問題が出て来るであろう。そうなつて来れば話は正しい方向に進んでいる。それでよいのである。社会科の学力について、最も本質的な考え方の転換を要求されている点はまさにその点である。今の大人が知っていることを口うつしに伝えるという社会科は、前世紀的な社会科である。それでは二十一世紀の世界に働く子どもたちの学力を養っていることにならない。二十一世紀の子どもは、二十一世紀の世界を自分で見ることができなくてはならない。

＞国立教育研究所＜